

# イエイル・レポートからランド・グラント・カレッジへ：ジョ ナサン・ボールドウィン・ターナーと知の共和国構想の誕生

## From Yale Report to Land-Grant Colleges: Jonathan Baldwin Turner and the Birth of the Idea of a Republic of Knowledge

立川 明 TACHIKAWA, Akira

● 国際基督教大学  
International Christian University

**Keywords** イエイル・レポート, ランド・グラント・カレッジ,  
ジョナサン・ボールドウィン・ターナー, 産業大学, 知の共和国

Yale Report, land-grant colleges, Jonathan Baldwin Turner, industrial university, the  
republic of knowledge

### ABSTRACT

定説では、19世紀の半ば以降に登場するランド・グラント・カレッジは、1828年のイエイル・レポートが定式化した古典的カレッジにとって替ったといわれる。本論では、こうした定説に疑義を差し挟み、定説とは反対にランド・グラント・カレッジの構想はイエイル・レポートの主張の延長線上にあり、後者の提案の具体化でさえある、と主張する。イエイル卒のジョナサン・ボールドウィン・ターナーは1851年、科学と文芸の諸原理こそ優れた教育の基礎であるとの原則を応用して「産業大学論」を公表した。産業大学を中心として、ワシントンの中央研究所と産業諸階級とを結ぶ教育体系を提唱したターナーは、宗教に基づくかつての「公共性」に替えて、知の共和国に基づく新しい「公共性」を高等教育に打ち立てたのである。

According to the standardized interpretation of the history of American higher education in the nineteenth century, the Land-Grant Colleges displaced the position of the Yale Report of 1828. The present author would contend that, on the contrary, the former have in fact fulfilled the programs which the Yale Report had advocated, especially in its first part. Jonathan Baldwin Turner, an Illinois college teacher and farmer, a one-time protegee of Jeremiah Day at Yale, promoted the admissions of industrial classes to college education on the basis of the Yale Report idea. That idea referred to the justification of the basic principles of science and literature as the foundation of a superior education. By envisaging an industrial education as dynamic interactions of all practical workers and the Smithsonian Institution as the academic center, via mediating industrial universities, Turner effected a shift of the ground for public higher education from the traditional religious solidarity to the future-oriented republic of knowledge.

## 1 はじめに

1862年に合衆国連邦議会を通過し、リンカーン大統領が批准したモリル法は、19世紀前半までは主流であった「伝統的なカレッジ」に替わる、新構想の大学の一大潮流を推進した立法として通常は評価されている。一例をあげればクラーク・カーは、今や20世紀の大学論の古典となった『大学の効用』(1963年)の中で、イエイル・レポート時代のイエイルを「反動の主要な拠点」と位置づけ、それに対抗して結果的には手を携えたジョンズ・ホプキンスとランド・グラント・カレッジとが、アメリカ的な近代大学の嚆矢となった、と主張している。<sup>注1</sup> 大学史家のフレデリック・ルードルフは同様に、レポートが1860年代にはすでに伝統的なカレッジ教育の象徴の地位を確立していたと指摘した上で、モリル法前後の二三十年には、「アメリカの教育者たち、慈善家たち、政府関係者たちは皆、1828年のイエイル・レポートとの絶縁を表明した」と記述している。<sup>注2</sup> 本論は、こうした定説への挑戦を試みる。これまでに発表した二つの拙論での論点に照らして考察するなら、イエイル・レポートのカレッジ教育論と、モリル法に基づくランド・グラント・カレッジの構想とを正面から対立させる図式には、疑念を差し挟まざるをえない。本論では、ランド・グラント・カレッジ構想の創始者の一人と目されるジョナサン・ポールドウィン・ターナーの産業大学論を、ジャスティン・S・モリルの論点と比較・分析し、イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジ構想とを正面から対立させるのではなく、共通な方向を目指すの運動の二つの局面として把握し解釈することを試みる。以下ではまず、イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジとの関連を改めて問う理由を整理して提出する。次いで、ランド・グラント・カレッジ構想の形成に絞って、1850年代に至るターナーの経歴を辿る。最後に、イエイル・レポートとの関連に焦点を合わせながら、1852年の「イリノイ州の産業大学向けプラン」に表明された、ターナーの産業

大学構想の特色を分析する。なお、後半には、ターナーの上記プランを訳出して掲載する。

## 2 ランド・グラント・カレッジが 高等教育に与えた影響

既に拙論でも論じたように、1828年のイエイル・レポートは、古典と数学を中核としたカレッジ教育が、新しい市民社会で有用な教育を主張する者たちからの挑戦に直面したとき、当時のカレッジ教育を体系的に擁護した。そうした限りでは、伝統的な教育の総決算であるといえる。しかし、レポートの歴史的な役割は、その保守性・近代性を巡る論争が示唆するように、単純ではない。<sup>注3</sup> 更に、対立する解釈の背後には、対立する歴史的な事実がある。確かに、レポート出現の後、有用な教育は古典・数学教育に入れ替わってゆく。<sup>注4</sup> にもかかわらず、これ以降、高等教育で実用的な分野が一方的に優勢となったわけではない。まず教育機関数から検討しよう。確かに、レポートの1820年代からの百年には、1890年代を頂点として50校の工業大学が創設された。<sup>注5</sup> 1860年代以降の百年には、ランド・グラントによる農工大学の新設か、既存の大学での農工学部の付設により、ランド・グラント・カレッジは70校余りに達した。<sup>注6</sup> カレッジが独占していた高等教育地図を、大きく塗り替えたのである。けれども、実用重視の大学・学部の増加は、伝統的なカレッジを数の上で圧倒したわけではない。ランド・グラントによる農工大学・農工学部を含む167校の大学を除外すると、1820年からの百年間に開設された伝統的なカレッジは405校であった。<sup>注7</sup> カレッジが工業大学とランド・グラント・カレッジの合計を三倍以上上回っていた。イエイル・レポート以来、高等教育において有用な分野がカレッジ教育を圧倒したというのはあたらないのである。

専攻別の学生数についても同様な傾向が認められる。表1は、上記の百年間の締めくりに近い1918-1920年での専攻別の学士課程の卒業生数を示している。仮に、文理(Arts and Sciences)の卒

業生を、カレッジ教育を修了者に等しいと看做そう。その数を農工業の卒業生と比較すると、2万7千対6千5百で4対1となる。確かに、男子学生だけをとれば、文理は1万4千3百に対し農工学の専攻者は6千4百余名で、2.2対1とその比率は低下する。それでも前者は二倍以上の優位にある。女子学生の場合は、家政学が男子学生の工学にあたと目されるので、これと農学を加えよう。すると、文理の1万3千対農(工)千名は、14対1対となり、女子学生では文理が農(工)を圧倒する。しかし、こうした男女差を勘案した上でもなお、農工学部が代表する実用的な分野が、専攻学生数において、カレッジ特有の教育を排除したと論じることが到底出来ない。むしろ、カレッジ教育は、20世紀に入っても、依然として多くの入学者を引き付け、農工学部での教育を圧倒し続けたといつてよいのである。

イエイル・レポートの歴史的な評価には、慎重を期する必要がある。レポートは一面では、やがて工業大学やランド・グラント・カレッジへと結実する高等教育での新傾向にたいする、保守反動のイメージを与える。しかしながら、レポートの内容は一面、ほぼ正反対の指向を持っている。<sup>注8</sup> しかもその第一部は、全体としては、時代を超えて説得力を備えた教養教育論を展開している。同レポートがそうした教育論の先駆であったのか、はたまた20世紀にも通用するカレッジ教育論をたまたま論じたに過ぎないのか。

いずれにせよ、実用的な諸分野が有力化した時代に、なお多くの学生を教養教育へと引きつけ続けた理由の一部として、その論旨の意義は今でも再検討に値するであろう。

翻って、それではランド・グラント・カレッジの出現の歴史的な意味は何だったのか。実用的な学問を、組織的に教える教育機関の走りであった点ではない。そうした機関は、フランス革命以来のヨーロッパには、エコール・ポリテクニクが代表する工業教育機関やプロシアの農業学校等、枚挙に暇がない。<sup>注9</sup> それのみではない。合衆国においてさえ、ランド・グラント・カレッジに遙か先駆けて、応用科学を体系的に教授する機関の構想と実践とが存在した。代表例はニューヨークのトロイに1824年設立されたレンセレーア・ポリテクニク・インスティテュートである。創立者スティーヴン・ヴァン・レンセレーアの言によれば、同機関の主な目的は「農民や職人の子女たちに、実験化学・哲学(物理=筆者)および博物学の、農業、家政、工芸および生産技術への応用を教える資格をもつ教師をつくる」ことであった。<sup>注10</sup> 加えて、1840年代から南北戦争期にかけて、既存のカレッジの多くも、農学や工学を学ぶ課程を併設した。1840年代のハーヴァードやイエイルにおける科学学校の設立、またアムハースト・カレッジにおける農学教育課程の開設はその具体例である。<sup>注11</sup> イエイル・レポートの出現の背後事情が示すように、19世紀前半の高等教育を巡る対立では、一方では近代科学とその応用とを強調しようとする勢

表1 専攻別の学士課程卒業生数, 1918-1919年

	Arts and Sciences	Agriculture	Commerce	Education	Engineering	Home Economics	Others
Men	14,272	2,035	1,397	197	4,400	-	612
Women	12,995	94	162	600	-	862	430
Total	27,267	2,129	1,559	797	4,400	862	10,42
Percentage	71.6%	5.6%	4.1%	2.1%	11.6%	2.3%	2.7%

力が伸長しており、他方にはそうした強調へ反発し、古典語と数学中心のカリキュラムを擁護する保守派が存在した。しかし、ランド・グラント・カレッジの構想はいずれでもなかった。モリル法の規定によれば、このカレッジの目的は「その他の科学および古典の学問を除外することなく、農業と工業に係わる学問の諸分野を教授すること」であった。<sup>注12</sup> 旧いカレッジと実用的な教育機関の中間をこそ目指したのである。

なお、ランド・グラント・カレッジの成立を、イエイル・レポートとの単純な対立で描かない方法は他にもある。大学史家のジョン・R・スーリーンは、ランド・グラント運動を、その多様な帰結に焦点を絞って叙述している。スーリーンは、モリル法が農工を中心に州立大学を拡充したとの俗説は誤りで、同法はイエイルからブラウン、ダートマスに至る私学を援助したのみならず、カリフォルニアでは東部の典型的なカレッジさえ誕生させたと主張する。<sup>注13</sup> 各州の実情に応じて対処法に大きな幅が許されていたのである。予想される如く、彼の論ではイエイル・レポート対ランド・グラント・カレッジという旧来の図式は一部修正される。その修正は多様な帰結への着目の結果なのである。これとは対照的に、筆者はランド・グラント・カレッジ構想の起源に焦点に合わせる。デューイに倣えば旧い方法であるが、しかしスーリーンの方法ではランド・グラント・カレッジとそれに先立つ伝統との関連は見失われやすい。本論の目指すのはそうした関連づけの方である。

### 3 イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジ構想

以上は、イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジとの相互関連の考察が必要な歴史的背景の一部である。これとは別に、そうした考察が必要な、更に直接的な事情が存在する。1862年成立の国有地贈与法の呼称が示すように、同法の提案者はヴァーモント州の下院議委員ジャスティン・S・モリル (Justin S. Morrill, 1810-

1898) であった。彼は「ランド・グラント・カレッジの父」<sup>注14</sup> として記憶されている。ところで、成功した運動には「真の」功労者争いがつきものであるが、モリル法にも例に違わずその構想の創始者に関わる論争がある。東部のモリルに対抗し西部から「真の」創始者と提起されてきたのは、イリノイ州のカレッジ教授・農民ジョナサン・ボールドウィン・ターナー (Jonathan Baldwin Turner, 1805-1899) である。1962年、当時アリゾナ大学の学長であったリチャード・A・ハーヴィルは次のように書いている。

ランド・グラントの大学制度を発明した手柄が誰に帰するのか、教育史家たちの間では、ヴァーモントのジャスティン・S・モリルか、それともイリノイの教育者ジョナサン・ボールドウィン・ターナーなのかについて意見が割れている。ターナーについては、こうした制度の可能性について1851年に早くも講演した証拠があり、他方こうした構想を実現したのはモリルであった。

<sup>注15</sup>

アメリカ大学の標準的な通史は大抵、モリル自身の貢献に加えて、ターナーがモリル法の構想に与えた影響にも言及する。<sup>注16</sup> ランド・グラント・カレッジの歴史書ともなれば、両者の役割に関わる検討は詳細を極める。1910年、イリノイ大学学長のエドムンド・J・ジェイムズは、関連の書簡や産業大学の設立運動に関わる一次資料を証拠に、ターナーこそランド・グラント・カレッジ構想の発起人であるとするモノグラフを公表した。<sup>注17</sup> 他方、初期のランド・グラント・カレッジ運動を分析したアール・D・ロスは1942年、ターナー側に立つ主張の矛盾と、ターナー自身がモリルのイニシアチブを認めている点とを指摘して、モリルに功績を帰する論を展開した。<sup>注18</sup> 更に1956年、エドワード・D・エディーは、一方で旧いカレッジとは一線を画するターナーの新構想大学の意義を認めると共に、他方では折衷案を首尾良くまとめる

政治家としてのモリルの手腕を評価し、ジェームズとロスの間に近い解釈を提唱した。<sup>注19</sup>

ターナーとモリルの貢献度を巡る論争は、ランド・グラント・カレッジが合衆国の高等教育史に占める位置、更には現代世界における大学の特色を考慮に入れるとき、重要と看做さざるを得ない。加えて、フロンティア論争に象徴される西部と東部との歴史的な対立も背景として見逃せない。<sup>注20</sup> けれども、大学教育論を焦点とし、かつイエイル・レポートとランド・グラント・カレッジとの関連を問おうとするわれわれには、ターナーとモリルの貢献度の差は最重要事ではない。むしろまず両者の教育歴の違いに注目せざるをえない。1810年にヴァーモントに生まれたモリルは、アカデミーでの二学期が最終学歴で、カレッジ教育は受けていない。勿論のこと、こうした経験はモリルを反カレッジ的な陣営に追いやらなかったのみか、却って彼を若者向け的高等教育の機会の提供に人一倍熱心にしたという。しかし、彼がカレッジ教育を受けなかった事実は記憶に留めておくべきである。<sup>注21</sup> 一方、1805年、マサチューセッツに生まれたターナーは、兄弟ともどもイエイル・カレッジで学んでいる。しかも、22才と比較的遅くカレッジ生活を開始した彼がイエイルへ入学したのは1827年、レポートの公表の直前にあたるのである。<sup>注22</sup> 卒業の後、新設のイリノイ・カレッジに教員として赴任したターナーは、わけあって1848年同カレッジを辞職して農民となり、やがてイリノイ州を中心とする産業大学の新構想の立て役者となるのである。

かくして、われわれの問題意識を前提として二人の教育背景の相違に着目すると、イエイル出身のターナーが、どのようにしてランド・グラント・カレッジの構想を抱くことになるか、を問うことが俄然興味を中心となる。ターナーとモリルの新構想大学の概略は、大きくは食い違っていない。他方、イエイル・レポートの教育論と、ランド・グラント・カレッジ構想とは、対極的に相違すると通常は看做されている。とすれば、二人の貢献度や優先権より遥かに興味ある問いは、イエイルの直中で教育されたターナ

ーが、いかにしてそれとは「対極的に相違する」構想を抱くに至ったかである。一体、イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジ構想とは、具体的な歴史の文脈の中では、どのような関係に立っているのか。果たして両者は真っ向から対立しているのか。それとも、根本的な連続の関係が認められるのであろうか。

まず検討すべきは、ターナーとイエイルの関係である。ジョナサン・ボールドウィン・ターナーは六人兄弟の末っ子であり、父からは農家の跡取りと目されていた。しかし、次兄のエイザ・ターナーが牧師職への深い関心からイエイル・カレッジ、更にはイエイル神学校へ進学し、その次兄から1827年、ジョナサンにたいしてイエイル・カレッジへ進学するよう強い勧めがあったという。仕事のかたわらまずは予科での学びを終えたジョナサンは、イエイルの古典科へと正規に入学した。<sup>注23</sup> 当時の合衆国で最も保守的と称されたカレッジにおいて、しかもキングスレイの下でギリシア・ローマ古典を中心に学んだわけで、彼の受けた教育はイエイル・レポートの「権化」であったとって過言ではない。<sup>注24</sup>

1827年、次兄のエイザ・ターナー及びジュリアン・M・スタートヴァント含む数名が回心体験を経てイエイル・バンドを結成し、イリノイの地で布教活動と教育の普及とを試みる決意を固めた。彼らは程なく、ライマン・ピーチャーの息子であり、イエイルの卒業生でもあるエドワード・ピーチャーを学長に迎え、イリノイ州では初のカレッジとなるイリノイ・カレッジをジャクソンヴィルに設立した。ジョナサンがイエイルの四年次に在籍した1832年から33年の冬、エドワード・ピーチャーはイエイル学長のジェレマイア・デイに宛て、新設イリノイ・カレッジでの教員となるに相応しい一名の推薦の依頼を送付した。この依頼に答えてデイ自らが推薦したのが、ジョナサン・ボールドウィン・ターナーであった。ジョナサンは予科在籍中に合衆国初のギムナジウムで教職の経験を積み、成績は優等で敬虔なクリスチャンの模範、とデイから折り紙をつけられていたのである。<sup>注25</sup>

かくして、人物の系譜の上で、イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジ構想との繋がりの一端が確認された。ランド・グラント・カレッジ構想への貢献度を比較・考量する場合は、モリルとターナーそれぞれの思想・行動と、モリル法に結実する立法行為との連関が中心課題となる。しかも、既述のように、その判断は別れる。しかし、イエイル・レポートとランド・グラント・カレッジ構想との連関を問う見地から重要なのは、ランド・グラント・カレッジ構想の立て役者の一人が、イエイルの卒業生、しかもイエイル・レポート時代に在学して古典を学び、他ならぬジュレマイア・デイの目にも適った人物だったという点である。一体、イエイル・レポートのカレッジ教育論は、ジョナサン・ボールドウィン・ターナーを通して、ランド・グラント・カレッジ構想に、何らかの影響を及ぼしたのだろうか。及ぼしたとすれば、どのような影響であろうか。こうした問いに暫定的にせよ解答するには、二つの拙論でのイエイル・レポートの分析を前提として、まずターナーのカレッジ教師時代を概観し、特に彼の教育論上に重要と思われる側面を検討する必要がある。次いで、そうした検討結果と、ターナーのランド・グラント・カレッジ構想、すなわち1850年代初頭に纏められた産業階級向け大学論とを比較・検討して、彼にユニークな論点を抽出すべきであろう。ランド・グラント・カレッジの法律化を推進した際のモリルの大学観との比較も、改めて必要になるであろう。最後に、高等教育論として、イエイル・レポートのカレッジ教育論と、ランド・グラント・カレッジ構想とを比較しよう。両者の違いは勿論であるが、しかし共通点にも十分に着目する。そうした作業を通して、イエイル・レポートがランド・グラント・カレッジ構想にたいして果たした、反面教師としての役割のみではなく、むしろその不可欠な前提の役割を確認したい。ランド・グラント・カレッジ構想についてわれわれの抱くイメージも、多少とも変容するのではないだろうか。

#### 4 ターナーと初期のイリノイ・カレッジ

既述のように、イエイル・バンドが参画し、イリノイ州のジャクソンヴィルに創設されたイリノイ・カレッジは、1830年に教育活動を開始した。1833年、ターナーが五人目の教員としてイエイルから馳せ参じた当時のイリノイ・カレッジは、人口わずか千人の町の近郊に位置する、文字どおりのフロンティア・カレッジであった。<sup>注26</sup> 学長のビーチャーを除くと、他の教員は数学および自然哲学のスタートヴァント（イエイル卒）、ギリシア語・ラテン語のポスト（ミドルベリー卒）、そして化学・鉱物学・地質学のアダムズ（ボードン卒）であり、ターナー自身は雄弁術と文芸学（*Belles Lettres*）を担当した。初期のカリキュラムは旧態依然であり、様々な自然科学系の科目は含みつつも、その主体はギリシア語、ラテン語そして数学であった。当時のイエイルやハーヴァードのカリキュラムと基本的に同一だったわけである。<sup>注27</sup>

しかし、当時の東部の諸カレッジと比較するならば、イリノイ・カレッジを囲む諸条件はフロンティアのそれであった。1830年代には多くのカレッジ、中でも西部の新設カレッジは一方では建物の建設資金と職人たちの不足に悩み、他方では授業料の支払いもままならない貧しい学生たちを多く抱えていた。そうした諸問題を一気に解決する方法は、学生たち自身を働き手として雇うことであった。<sup>注28</sup> 労働と教育の一体化を目指したペスタロッチの思想も一役買った。<sup>注29</sup> 1830年代の比較的短期の間ではあったが、オハイオ州のデニソン・カレッジ、マリエッタ・カレッジでは、日に二から三時間、週に五日間の労働を学生たちに課し、その対価を彼らに支払っていた。<sup>注30</sup> 同じオハイオ州のオーバーリン・カレッジも、学生の健康から始まり、健全で強靱な思考、経済性、勤勉、常識知の獲得まで至る利点を列挙し、日に三から四時間にわたり農工の作業に学生たちを従事させた。<sup>注31</sup> 多少東部へ戻るが、ペンシルヴァニアのアレゲニー・カレッジは、同じ1830年代、農作業と手作業の両方を導入したが、

その根拠を説明した報告書は後のターナーの主張を彷彿とさせる。同報告は当時のカレッジ教育を次のように批判する。

学問は（既存の）専門職のみに限定されてはならない、そうした状態は反共和主義的である。農民も職人も学問を身につけるべきである、というのも共和国では、資格さえあれば、誰でも公職に就けるのだから。<sup>注32</sup>

こうした言明は同時に、「資格ある者なら誰でも公職に就けるこの国では、高度な学識はいかなる階級の人々にも限定されてはならない」という、イエイル・レポートの一節のリフレンでもあったのである。<sup>注33</sup>

イリノイ・カレッジも同様な諸条件、運動の影響下にあった。したがって、設立当初から学生の便宜のために、手作業の導入が計画されていたのは当然といえる。便宜はカレッジのためでもあった。辺境の地では、熟練した職人を探すのは至難であり、その方面の心得のあった二名の学生は極めて重宝された。彼らはカレッジの建物の一部の建設を担当したのみならず、そうした仕事はフロンティアでは高く評価されてカレッジの貴重な収入源にもなったのである。同様に、低廉な土地を大量に買い込んだカレッジは、それを学生たちに安価で貸し付け、彼らにトウモロコシを栽培させたのである。<sup>注34</sup>しかし、イリノイ・カレッジでも、他のカレッジと同じく、こうした試みにたいする学生の不満が蓄積し、早くも1837年には退潮が報告されるようになる。試みはカレッジにとっても、経済上むしろ負担となり始め、やがて破産状態に突入する。農場はカレッジの財務担当に引き取られ、作業場は閉鎖されて、終には医学部に引き継がれてゆくのである。<sup>注35</sup>

ところで、1830年代後半の金融恐慌と不景気に直面して、手作業を尊重する運動が退潮すると共に、殆どのカレッジはこうした実践を放棄した。そうした運動に関わった者の多くも、同様に方向転換したようである。にもかかわらず、

伝統的な「知的な」訓練と、手仕事とを両立させようとした経験は、西部を中心とするカレッジとその構成員とに、幾許かのインパクトを与えたようである。ジョナサン・ボールドウィン・ターナーは、1848年、それまで15年間奉職したイリノイ・カレッジを辞職した。伝記によれば、ターナーの奴隷廃止論と、宗教上の開明的な立場による周囲との対立が、その理由であったという。<sup>注36</sup>またイリノイ・カレッジの百年史は、ターナーがカレッジ退職後、自ら農業に従事して数年を経て、「産業教育ないし実践的な大衆向けの教育」の推進に深い関心を抱き始めた、と記述している。<sup>注37</sup>ということは1850年代であるが、この時にはターナーはすでに「産業大学論」を公表しており、彼の関心はもっと早期に培われたと理解するほうが自然であろう。実際、最近公刊されたイリノイ・カレッジの歴史書は、ターナーの新大学運動とカレッジとの関係について、以下のような多少とも立ち入った記述を含んでいる。

イリノイ・カレッジを農工学校へと作り替ようとする彼の種々の試みが頓挫した後、1850年、J. B. ターナーは連邦政府の拠出金に基づく州立大学を提唱する公のキャンペーンに着手した。<sup>注38</sup>

この記述が含む主張を分けてみよう。第一に、産業大学の設立を目指すターナーの運動が、1850年に転機を迎えること。第二に、それに先立つ時期には、ターナーはイリノイ・カレッジ自体を、農工学校（an agricultural and industrial school）へ作り替えようとしていたこと。第三に、1850年代以降はターナーはイリノイ・カレッジを超えた、公の産業大学設立運動へと努力を傾注してゆくこと。この内、第一は同年の5月、自身が会長を務めたイリノイ州教員協会の年次大会で、ターナーが新構想の大学案をはじめて公式に発表したときを指すとみてよいであろう。<sup>注39</sup>また第三については、自伝も多くの記述を含み、重要な資料も編集されている。<sup>注40</sup>本論にと

っては、第二の点が重要である。そこには、イエイル・レポート時代のジェレミア・デイの下で学んだターナーと、辺境の地のイリノイ・カレッジでの諸現実と実験とに直面したターナーとの、交錯の経験の記録があるはずであり、ランド・グラント・カレッジ構想の出発点の事情が認められるはずである。しかし、残念ながら公刊された資料には、そうした主題に関わる具体的な記述が殆ど見られない。今後の史料の探索と分析とに待つ他はない。

にもかかわらず、ターナーの娘であり、その伝記の著者でもあるメアリー・T・キャリエルは、1850年に公表したターナーの大学案は、それまでの20年に渡る彼の教育改革の努力の集大成である、と述べている。<sup>注41</sup> 彼の大学案を検討することで、それに先立つターナーの改革の努力の内容の一端は知られるはずである。そこで以下では、ランド・グラント・カレッジの設立に関わるモリルの諸演説とも比較し、かつイエイル・レポートの主要な論点を念頭に置きながら、ターナーの新大学構想の内容を検討する。なお本論に続くターナーの産業大学論の試訳でも、イエイル・レポートの試訳の例に倣い、各パラグラフに [ ] 入りの番号を付す。以下での引用ないし参照箇所はこの番号で示すものとする。また1858年と1862年の連邦議会におけるモリルのスピーチ、On the Bill Granting Lands for Agricultural Colleges. (1858)および Speech of Hon. Justin S. Morrill, of Vermont. (1862)からの引用・参照箇所は、それぞれ前者は(1858:13)、後者は(1862:7)のように本文中に略記して示す。

## 5 ターナーの産業大学論

ムール・カーティが論じたように、植民地時代のアメリカのカレッジが公的な教育機関であったのは、現代の常識とは正しく反対に、それらが「宗教的な目的と性格とを有していたから」である。その時代には宗教こそが根本的に公的な関心事だったのである。<sup>注42</sup> 現代のアメリカ合衆国の大学が、設置者のいかに関わらず公的

な性格を有することは、連邦政府および州政府の補助金支出だけを取りあげても、疑問の余地なく明らかである。しかし現代におけるその「公的な性格」の根拠は宗教でない。植民地時代から現代までの期間に、「公的な性格」の根拠は変容した。拙論でも論じたように、この主題はイエイル・レポートをめぐる論争の争点の一つでもあった。レポートの公表されたのは、イエイルが公的な援助を失って財政的な危機に直面したときであり、その課題の一つは危機の克服方法の模索だったのである。<sup>注43</sup> イエイル・レポートに続き、文字どおり公立大学のモデルとして登場したのが、1862年のモリル法を基点とし、連邦政府と州政府を共に巻き込んだランド・グラント・カレッジである。アメリカ大学史において、1828年のイエイル・レポートから1862年のランド・グラント・カレッジに至る30年余りは、植民地時代以来のカレッジの「公的な性格」の根拠が、公的な関心事としての宗教から、何か別な根拠へと決定的に転換した時代として把握することもできる。一体その変換はどのような内容と特色を備えたものだったのだろうか。

こうした観点からターナーの産業大学構想を検討するには、モリルとの比較以前に、ターナーの先駆的な提案となる具体例をまず取り上げるのが便利である。ターナーをモリル法の原作者であると主張するエドムンド・J・ジェイムズは、イリノイが連邦政府からの土地の供与を受けてかなりの大学用基金をすでに蓄えていた1832年、早くもその利用法についてランド・グラント・カレッジに近い提案がなされたとして、新聞への長文の投書を採録している。投書の内容は、イリノイには件の基金と、更なる公有地の処分とによって、この時点ですでに高等教育機関を創設しその基本財産を確保する条件が整っていること。そうした機関の所在地では、人口の増加と経済活動の活発化に伴う土地の値上がりも期待でき、しいては州や国の富の増大につながることに言及していたのである。<sup>注44</sup> 投書の著者は確かに、そうした機関では「文芸と科学の振興」を図るとの一行を挿入してはいる



が、その以外は大学が地域に及ぼす経済効果を論拠にして、その設立を正当化している。歴史家ダニエル・ブアスタインが後に定式化した、フロンティアにおける「ブースター・カレッジ」の論拠と同列であると看做してよいであろう。<sup>注45</sup>

1851年11月、すでにイリノイ・カレッジを退職して農業に従事するかたわら、州内の農業や教育運動を指導する立場にあったターナーは、農民大会で請われ、産業大学についての彼の構想を公表した。カレッジの教師および教育関連の運動の経歴も反映したターナーの論は、上記の投書に比べて遥かに体系的で、かつ大学教育論を中核とするといつて過言でない。疎密のある点は否めないが、全体として、産業大学が新構想である所以を網羅した議論である。形態上でもイエイル・レポートと比較が可能な文書である。

ターナーの産業大学論は、近代社会の構成員を専門職と生産者の二つの階級へと区分することから始まる。しかし、単純な二分割論ではない。まず規模については、生産者階級が専門職階級を95対5ないし99対1で圧倒的に凌駕するが、しかし両者は対立関係にはないどころか、支えあっている、と彼は主張する。にもかかわらず、両者の置かれた状況には決定的な違いが見られる。どこにおいてか、ターナーによれば、二つの階級が享受する「相応しい教養教育 (appropriate liberal education) に・・・巨大な開きがある」のである。教養教育における「巨大な開き」とはどのような事態か。ターナーの主張では、この世界には、二つの階級どちらにとっても、「同一の普遍的で抽象的な意味での科学」は、等しく存在している。しかし実際には、科学は専門職階級にはごく身近に実在するのにたいし、同じ科学は生産者階級には存在しないも同然である。何故か。専門職階級は、例えば医者のように専門的な医術の体系やその訓練機関を所有し、そうしたパイプを通して科学へと一直線に繋がっている。一方、生産者階級が従事する仕事には、意識化された専門技術の体系とその訓練機関とが存在しない。そのため、生産者階級には科学への道が閉ざされている。それ

自体としては存在する科学は、なお生産者階級の教養 (の重要な一部) とはなりえていない。「相応しい教養教育」の観点からは、両階級の間には決定的な開きがある、というのである。[2]

教養教育に関わる二つの階級の間の差異を、イエイル・レポートの論点から更に検討してみよう。例えば、当時は旧来の専門職が学ぶカレッジでは純粹で理論的な知識が、生産者階級を志向した新大学では実践的で技術的な知識が、それぞれ強調されがちであった。<sup>注46</sup> こうした二極化の傾向は、大学論としてどんな問題を孕むか。レポートに沿って解釈すれば、旧来の専門職の職務の遂行が理論的な知識に依存するという主張は、十分に正確ではない。彼らは確かに理論的な知識を「もっている」が、そのみでは専門職の任務を果たせない。様々な実践的な技術知・技能の体系も不可欠なのである。しかも、そうした実践知・技能は、基礎としての理論的な知識、「科学の諸原理」と結びついている。専門的な実践知・技能は基礎としての理論的な知識をもつがゆえに、信頼性を獲得する。更に、理論的な基礎の汎用性の結果として、実践知・技能の体系は不断にしかも多方面へと拡大してゆく。専門職者は本来、理論的な知識の理解と、実践知・技能を用いての職務の遂行とを通して、両者を媒介する位置にいる。優れた専門職者である以上、実践知・技能に基づく活動と反省とを経て、実践知・技能を拡大することは言うに及ばず、ときとすると理論的な知に問いを投げ返す。理論と実践のこうした往復作用こそ、イエイル・レポートが推奨した生涯にわたる優れた教育の内実あり、ジェレマイア・デイの設定したカレッジの目的はそうした優れた教育の基礎を置くことであった。イエイルではそうした基礎として科学と文芸の諸原理を徹底的に教授し、具体的な応用場面については、仕事の現場で容易に接触できるものとして、当面はカレッジ教育から除外したのである。

生産者階級が「相応しい教養」を欠くというターナー主張は、彼らの実践知・技能の不足の指摘に止まらない。更には、実践知・技能を媒

介とし、産業の諸問題を科学と文芸の基礎に立ち返って思考し行動しうる力の欠如、という意味を含んでいる。生産者階級に真に必要なのは、専門的な知識に止まらず、一層正確には彼らに相応しい「教養」であって、優れた生産者階級となるに相応しい基礎を置くことこそ、ターナーの構想する産業大学の一大目的であるといえるのである。<sup>注47</sup> 彼らは既存の専門職階級の「類似の教養教育の体系を必要としている、しかも彼らの仕事に適応した体系を。」[12] 彼らは「思索する労働者」となるべきなのである。[48] 同様の主張をモリルは多少異なった表現で述べている。提案されている法律案は、旧来のカレッジや専門職訓練の縄張りを荒らすのが目的ではない。目的は「すべての者がそれぞれ自己の仕事を理解できるようにすることである。」(1858：8)

では生産者階級に「相応しい教養」をどのように構築し、伝達したらよいか。既存の専門職者たちには、カレッジで学ぶ科学や文芸の諸原理は、実務での実践知・技能の体系、更には医学校や法学校、神学校での訓練を前提として、実務上はじめて有意義となる。生産者階級が教養教育を欠くのは、正しく逆の理由による。彼らは生産者階級に固有な実践知・技能の体系も、その訓練機関も所有していない。したがって、ターナーがまず提唱するのは、そうした実践知・技能を広く収集し体系化して提供する機関、それらと関連の深い理論的な知識を組織的に提供する機関、収集した実践知・技能を理論的な知識を媒介としながら客観的な手続きで検証しかつ高度化する機関、そしてそうした知識を州民全体に広く普及する機関としての産業大学の設立である。しかも、これは夢物語ではない。そのための基金は、1841年の法律により、全ての新しい州にはすでに与えられているというのである。[52] [1862：3]

ところで、予期されるように、産業階級の教育を担う機関はターナーの構想では重層に組織される。99パーセントの国民向けの教育システムという主張から得られる連想とは正反対に、

彼の教育論は一面では完全に「高等」機関を中心としている。彼によればその理由は単純明解である。

知識も水も低所から高所へは流れないからである。いかなる人々も、まず最初に高等教育機関と知識の源泉とを創設し、下部機関にたいして、教師その他を供給できるようにしない以上、何らかの価値をもった公立小学校や、下級の学校の体系をもったためしはないし、もつことが出来ないであろう。[13]

しかも、ターナーの提案では大学は頂点を形成するわけではない。頂点を形作るのは、国民にとっての知識と精神の一大中心、「国立科学研究所」と呼びうる組織である。この組織は「国民精神の偉大な中心発光源として作用し、すべての中小機関がそこから光と熱を供給され、逆に中小機関に生じた熱と光りをそこへ反射する」施設なのである。[14] ターナーはこうした施設は合衆国にすでに実在するという。首都ワシントンに設立されたスミソニアン研究所がそれにあたるのだという。<sup>注48</sup>

この中心機関と連携して州ごとに一校設けられるのが「産業大学」であり、その下には郡や町単位で支部、ライシウム、高等学校が設置される。[15] したがって、産業研究教育に関するターナーの大きな構想の中では、大学は頂点ではなく、むしろ中間の機関、三重構造のいわば第二番目にあたるのである。スミソニアン研究所は、各大学から集められた理論的・実践的な知識を高度に純化し抽象化する理論知の研究所以である。大学は一方では研究所の延長として、州の単位では理論知の研究の中心となり、その成果を支部機関や、ライシウム、高等学校を通して州民にくまなく普及する。大学は他方では、そうした機関や州民から直接寄せられる実践的な課題や成果を検討し、そうした中でも抽象度が高く普遍性を帯びた部分をスミソニアン研究

所へと伝達する。ターナーの産業大学の構想は、こうした中間の機関としての位置づけを前提として、はじめて理解しやすくなるであろう。

産業大学はまず、生産活動を念頭に置いて、学生が必要とするあらゆる分野の科目を揃えねばならない。すなわち、動物学、植物学、農学、工学、更には政治、経済学、通商、健康にかかわる学問を、動物の本能や繁殖、成長、土壌の性質や再生、材料の強度や耐久性に関する科目、労働経済学や通商上の実務的な諸法に関する科目などの形で、提供せねばならない。[19] 教授たちが理論的な知識の背景を有するのは当然であるが、ただ教育に携るだけではない。彼らは知識自体を増加させ、その応用をも拡大するのである。そのためには、例えば農業では、年次の諸実験を「継続して行うべきである。」[22] 実験は穀物や動物の生産や繁殖についてのみでなく、その病気に関するものも含むであろう。工芸方面に応用を拡大すれば、労働節約のための様々な道具、機械、動力等にかかわる実験や改良の工夫が試みられよう。更に、生産過程や交通に関する実験的な研究も行われるべきであろう。そうした諸実験を通して、教授たちは生産者階級に不可欠となるような文献を作製せねばならないのである。[24] [28]

こうした諸実験には多様な施設が必要である。まずは様々な条件を満たす広大な耕地である。農園や果樹園、更には多種の家畜を収容し、研究するための畜舎。加えて、様々な道具、機械、動力等を格納し、実験や改良を施すための大きな倉庫も必要である。産業製品や自然産品を図解し展示する博物館。講義や通常の物理、化学、解剖等の実験を行う建物についても同様である。最後に、生産者階級に有用な文献を収集し整理した産業図書館が設置されるべきであろう。[18] [27]

上記の研究教育の諸活動、それを可能にする施設、そして担当の要員が産業大学を構成するのであるが、しかしこの大学の年間の最大行事は卒業式の前後に到来する。その前後の数日にかけて大学は、州民の全てを相手として展示会

を開催する。所有するすべての教育研究上の資源、州民から寄託された全ての産物・製品を展示し、教員と学生を動員して産業上に有用な講義を公開する。この大学が、州の全ての生産者階級のために存在することを、象徴的に実演し宣伝する祝祭の日とするのである。[33] ターナーの産業大学の構想は、スミソニアン研究所という一大中心を起点として、各州民の末端にまでくまなく及んでゆくというその特有な全貌の要であることが明らかとなる。中間者としての大学に媒介されて、一方では全国にとっての中央研究所と、他方では全州民という両極端の間で、研究教育上の絶え間ない相互交渉が展開されてゆく。国民の大多数を占める産業界階級向け教養教育の巨大なシステムが構築されて起動し、旧来の専門職とも分業しあいながら、合衆国の生産活動を支えると共に、民主的な国家の基盤としての知的コミュニケーションのネットワークを機能させるのである。

ターナーの産業大学論の最後に登場する大学管理論についても、ひとこと言及したい。というのも、産業大学は文字どおり全州民の機関であり、その要件を満たすために「州民により」管理されねばならないからである。ターナーは大学の基金を受領し、その設置場所を選定する理事会を、まずは州知事が任命する方式を提案する。次いで理事会自身が十名余の理事を増員し、総計十数名で構成する理事会が基本財産を受け継ぐとともに、大学の管理に最終的な責任を負う。ここで重要なのは、理事会は議会にたいしてでもなく、宗派、政党にたいしてでもなく、「州民たち自身にたいし直接に責任を負う」ことである。具体的には、理事会と州民全体とは、一度成立した理事会のあらゆる構成員の罷免権を専有することが規定されるのである。[57]

## 6 モリルのスピーチとの比較： 宗教共同体から知の共和国へ

それでは、ターナーの大学構想の特色を更に際立たせるために、ジャスティン・モリルのい

くつかの論点と比較してみよう。1858年に議会の通過したモリル法はブキャナン大統領の拒否権発動に会ったため、モリルは同法案を1862年にも、議会で再度説明することとなった。四年を隔ててはいるが、二つの法案の趣旨説明の演説の内容は、本人も断っているように、基本的に同一である。[1862:3] ターナーの文書が産業大学の構想の体系的な展開であるのとは対照的に、モリルの文書は法案への賛成を直接に議会へ呼び掛ける政治的スピーチである。にもかかわらず、大学教育の目的、内容、方法等に関し、両者には比較可能な個所は少なくない。以下にその二三点を取り上げよう。

まず第一に、誰のための大学という観点のずれが認められる。ターナーの構想は二つの階級を教養教育の点から対比し、その上で旧来の階級に加え95-99パーセントの人民向けの産業大学を提唱する。他方、モリルの両スピーチでは、合衆国の農業の現状と将来への危機感が法案の提出の一大前提となっている。無知に基づく搾取により年々痩せこける農地と、農業産品の生産性の深刻な低下とが、いかに目に余るか、モリルは様々なデータを駆使して確認し周知させる。ヨーロッパから学ぶか、ないし国内の他の産業部門を参考にして、農業教育を本格的に導入しない限り、遠からず破局が訪れるとモリルは論じる。[1858:3-5; 1862:4-5] こうした危機を回避して農業の安定した発展を確保するには、農民向けの教育機関の設立が当面の最大の課題である。(ちなみに両法案の正式名称は、*Bill Granting Lands for Agricultural Colleges*であり、*Mechanic* は入っていない。)彼らに安価な科学教育を与え、改良した土地で収入の増加を図り、農民人口の著しい減少に歯止をかけること、それ以外に国家の繁栄の基本的な保障はない。[1858:14; 1862:5-6] 農業大学こそ全ての基礎をなすというのである。[1862:7] 確かに手工者の教育へも言及してはいるが、モリルのスピーチでは全く従属的である。[1862:7] ターナーが、あらゆる産業部門を担う生産者階級向けの高等教育組織を構想しているのに

比べて、モリルの提言は時局の課題と、政治的な駆け引きとに、相対的に左右されているといえよう。

第二に、既述の通り、ターナーの構想は教育機関を重層的に想定し、大学が中間の位置を占めている。モリルには、スミソニアン研究所のような中央研究所も、逆に支部や、ライシウム、高等学校のように、地域と大学を結ぶ機関への言及も見られない。彼のスピーチに顕著なのは、科学の殆どの分野が農業へ応用可能である点、そうした訓練を導入して農業を単なる技術から科学のレヴェルにまで高め、「学識ある、リベラルで、知的な仕事」へと向上させることへの訴えであり、そうした目標の実現にあたり農科大学が果たす役割への強調である。[1858:7,10; 1862:7] 合衆国に独自の教育体系の中で、研究と教育の普及について大学が果たす固有の役割は論じられていない。むしろ、ヨーロッパ諸国での様々な実践例の紹介や、ドイツ人化学者リービッヒの業績への礼讃が示唆するように、モリルはヨーロッパでの科学研究と農業教育の実績への依存を前提に、農科大学を構想してさえいたようである。[1858:8-11]

第三に、学生たちを大学の内外で労働に従事させて訓練し、学費の一部かそれ以上を捻出させようと提案する点で、モリルはターナーと同一意見である。[1858:9 1862:2] けれども、自らもカレッジ教育を受ける機会を逸した政治家モリルにとっては、向学心に富む貧しい若者への教育機会の提供が最大の関心事であった。[1862:2] ターナーの構想では学生の農業・手作業への参加は、大規模な農業上の実験、道具の改良、大学での研究成果の普及への共同参画を伴っている。[24] 中でも年に一度の展示会では、「教授たちや勉学の進歩著しい学生たちが・・・多様な研究対象・・・について、間断なく講義し説明する」のである。[33] 確かにモリルも、農科大学での正確な実験の重要性を確認してはいる。しかし、それは素人の工夫を諫め、専門の学者を擁する「徹頭徹尾科学的な大学」において行う実験の水準を期待するである。

[1858:8] 再びドイツの大学の影響を見る思いを、筆者は禁じ得ない。いずれにせよ、モリルとターナーの大学構想では、若者の役割も多少異なってくるのである。繰り返すが、モリルのスピーチはあくまで政治的演説であり、ターナーの大学論との比較には多少とも無理はある。しかし、彼の諸論との比較を通して、ターナーの産業大学論の特色を際立たせることには役立つであろう。

モリルとの比較を経て、われわれは今やターナーの構想の固有な意義を結論する場面に立ち至った。ターナーの構想した産業大学は、何よりも大学の新しい「公的な性格」の根拠を、大胆に打ち出したといえる。イエイル・レポート以前の合衆国の諸カレッジは、各州それぞれがキリスト教の教派を公認していたが故に、「公的な性格」を有する教育機関であった。少なくともハーヴァードとイエイルとは、それぞれの創設から1820年代に至る迄、植民地（独立後は州）から、相当額の援助を受け続けていた。しかしその後は補助は途絶える。<sup>注49</sup> 1828年のイエイル・レポートは、こうした体制に替わる新しい「公的な性格」の根拠をすでに模索し始めていた。イエイルの用意した解答は、カレッジ教育は旧来の専門職のみでなく、あらゆる「優れた教育」の基礎を提供できると、いうものであった。科学と文芸の諸原理の徹底的な教育は、医・法・神のみでなく、工業・商業・農業を含むあらゆる優れた生産活動の基礎として不可欠な貢献をなし、したがって合衆国を構成する全ての階級、全ての国民からの支持を受けるに値すると主張した。学長のジェレマイア・デイは、レポートの第一部でそう宣言したのである。

しかし、真に説得力のある「公的な性格」を獲得するには、デイの議論は更なる具体化を必要とした。1850年代のジョナサン・ボールドウィン・ターナーの大学論は、そうした具体化に向けて、大きな前進を画したのである。科学と文芸の諸原理が、伝統的な専門職のみならず、あらゆる優れた生産活動の基礎でもあるとの主張を展開した。そうした諸原理が、国民の大多

数を構成する生産者階級にも現実に手に届くようにする方法がある、と提案したのである。その具体案が産業大学論であった。各州の産業大学は、州のあらゆる生産者の技術知・技能を収集して科学的な検討を加え、具体的な解決策を実験で検証して理論化し、一方では結果の一部を中央の研究所へ報告してさらなる検討にゆだねる。他方では、中央の研究所および自らの研究成果をすべての生産者に向けての州の隅々まで普及する。産業大学での研究教育は、こうした前提を基に遂行される。そこでは、したがって、科学上の研究は十全な意義を獲得し、カリキュラムの選択は自由化し、カレッジの教育と職業訓練の統合が進捗し、農業・工業・商業の分野が確立し、さらに民主社会に奉仕する公務員やジャーナリストの養成が行われるようになる。<sup>注50</sup> アメリカ型の近代大学の誕生である。

勿論、ターナーの提案とモリルの立法化とにより、すべての階級の大学進学者が急増したわけではない。ランド・グラント・カレッジの成立後の三十年間、学生数はいずれの州においても低迷したのである。<sup>注51</sup> にもかかわらず、ターナーの提案は、既存の専門職を排除することなく、新たに高等教育を全ての生産者階級に解放することで、大学への機会を最大限に開く根拠を確定した。<sup>注52</sup> 大学を中間項として、中央の研究所と、国の隅々に居住する人民すべてとを、知識のダイナミックな交換過程に引き込むことを提案したのである。貴族ではなく人民の維持する研究中心と、働く全ての国民とを、大学での研究教育を通路として不断に相互作用させることによって、ターナーは正しく新たな知の共和国の基本構造を打ち立てた。[36] ランド・グラント・カレッジは、そうした共和国の要として、イエイル・レポートが開始した「公的な性格」の模索にたいし、レポートの主張自身に基づく一つの、そして恐らくは最大の解答を提供したのである。

## 註

- 注1 Clark Kerr. *The Uses of the University*. Fourth edition, Harvard Univ. Press, 1995 (1963), 10-13 参照.
- 注2 Frederick Rudolph. *The American College and University: A History*. The U. of Georgia Press, 1990 (1962), 243-44.
- 注3 「イエイル・レポートのカレッジ財政的観点からする解釈」『教育研究』43 (2001年) 参照.
- 注4 1994年時点で、合衆国の学士課程卒業生は約100万であったが、そのうち古典を専攻した者は約600名に過ぎなかった。1670名にひとりの割合である。Victor Davis Hanson et al. *Bonfire of the Humanities: Rescuing the Classics in an Impoverished Age*. ISI Books, 2001, 248 参照.
- 注5 Walter A. Lunden. *The Dynamics of Higher Education*. Pittsburgh Print. Co. 1939, p.185 参照.
- 注6 1860・70年代の設立校43校の詳細については、Edward D. Eddy Jr. *Colleges for Our Land and Time: The Land-Grant Idea in American Education*. Harper & Brothers, 1956, pp. 49-50 参照。1963年時点でのランド・グラント・カレッジの総計73校の詳細については、同289-91 参照.
- 注7 Lunden. *op.cit.* 参照.
- 注8 拙著「科学と文芸：イエイル・レポートを分かつもの」『教育研究』46 (March 2004) 参照.
- 注9 Allan Nevins. *The Origins of the Land-Grant Colleges and State Universities*. Civil War Centennial Commission, 1962, 18 参照.
- 注10 Eddy. *op.cit.*, 10 ; Palmer C. Ricketts. *Rensselaer Polytechnic Institute: A Short History*. Rensselaer Polytechnic Institute, 1930 および Samuel Reznick. *Education for a Technological Society*. Rensselaer Polytechnic Institute, 1968, Part One も参照.
- 注11 Earle D. Ross. *Democracy's College: The Land-Grant Movement in the Formative Stage*. The Iowa State College Press, 1942, 19ff. 参照.
- 注12 "the leading object shall be, without excluding other scientific and classical studies..., to teach such branches of learning as are related to agriculture and the mechanic arts." Section 4.
- 注13 John R. Thelin. *A History of American Higher Education*. The Johns Hopkins U. Press, 2004, 76-77 参照.
- 注14 モリルの最新の伝記は Coy F. Cross II になる *Justin Smith Morrill*. Michigan State Univ. Press, 1999. であるが、その副題は Father of the Land-Grant Colleges となっている.
- 注15 Herman R. Allen. *Open Door to Learning: The Land-Grant System Enters Its Second Century*. Univ. of Illinois Press, 1963, vii.
- 注16 Rudolph, *op.cit.*, 255; John S. Brubacher and Willis Rudy. *Higher Education in Transition*. Harper & Row, 1976, 63 ; Christopher J. Lucas. *American Higher Education: A History*. St. Martin's Griffin, 1996, 149-50 参照.
- 注17 Edmund J. James. *The Origin of the Land Grant Act of 1862*. Univ. of Illinois, 1910, 111pp. 参照.
- 注18 Ross. *op.cit.*, 特に第3章を参照.
- 注19 Eddy. *op.cit.*, 23-32 参照.
- 注20 歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーには、州立大学こそ失われゆくフロンティアの役割を継承すべしと切々と訴える大学論 (1910)がある。Frederick Jackson Turner. *The Frontier in American History*. Holt, Rinehart, Winston, 1962 (1920) 所収の "Pioneer Ideals and the State University" 参照.
- 注21 Ross. *op.cit.*, 48; Cross II. *op.cit.*, 5-6 参照.
- 注22 Mary Turner Carriel. *The Life of Jonathan Baldwin Turner*. Univ. of Illinois Press, 1961, 6 参照.
- 注23 ジョナサン・ボールドウィン・ターナーの名は、1830年のカタログに sophomore として記載されている。彼は恐らくはイエイル・レポートの出た1828年は23才でまだ予科に在籍中で、翌29年に24才でカレッジの古典科へ入学したようである。予科在籍中とはいえ、年齢的には十分成熟していた彼は、イエイル・レポートを読んでいたか否かにはかかわりなく、当時のカレッジ批判も知りつつ、古典科を選んだと考えてよいであろう。 *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1830-31*. 19 参照.
- 注24 キングスレイと彼の古典教育論については、拙論「科学と文芸」8-11を参照.
- 注25 Carriel. *op.cit.*, 11-12. 参照.
- 注26 *Ibid.*, 17 参照.
- 注27 Charles Henry Rammelkamp. *Illinois College: A Centennial History, 1829-1929*. Yale U. Press, 1918, 52-53 参照.
- 注28 David F. Allmendinger. *Paupers and Scholars: The Transformation of Student Life in the Nineteenth-Century New England*. St. Martin's Press, 1975, 57 & 94 参照.
- 注29 Rudolph. *op.cit.*, 217; Brubacher & Rudy. *op.cit.*, 92 参照.
- 注30 G. Wallace Chessman. *Denison: The Story of an Ohio College*. Denison Univ., 1957, 61-3 ; Arthur G. Beach. *A Pioneer College: The Story of Marietta*. Marietta College, 1935, 48-50 参照.
- 注31 James H. Fairchild. *Oberlin: The Colony and the College, 1833-1883*. E. J. Goodrich, 1883, 186-194 参照.
- 注32 Ernest A. Smith. *Allegheny-A Century of Education, 1815-1915*. The Allegheny College

History Co., 1916, 91-92に引用.

- 注33 立川明・新井元・村瀬泰信共訳「イエイル・レポート（1828年）第一部」『教育研究』43（March 2001），27.
- 注34 Rammelkamp. *op.cit.*, 60-61 参照.
- 注35 *ibid.*, 88-89 参照.
- 注36 *ibid.*, 55 参照.
- 注37 Rammelkamp. *op.cit.*, 232.
- 注38 Iver F. Yeager. *Julian M. Sturtevant 1805-1886: President of Illinois College, Ardent Churchman, Reflective Author*. The Trustees of Illinois College, 1999, 322.
- 注39 Carriel. *op.cit.*, 68 参照.
- 注40 *ibid.*, 68-197; James. *op.cit.*, 47-111 参照.
- 注41 Carriel. *op.cit.*, 68 参照.
- 注42 Merle Curti & Vernon Carstensen. *The University of Wisconsin: A History, 1848-1925*. Vol. I, Univ. of Wisconsin Press, 1949, 8.
- 注43 拙著, 「イエイル・レポートのカレッジ財政的観点からする解釈」参照.
- 注44 James. *op.cit.*, 40-42 参照.
- 注45 Daniel Boorstin. *The Americans: the National Experience*. Random House, 1965, 152ff 参照.
- 注46 Richard Hofstadter and C. DeWitt Hardy. *The Development and Scope of Higher Education in the United States*. Columbia Univ. Press, 1952, 36-38 参照.
- 注47 予想されるように, ランド・グラント・カレッジと教養教育との関係は重要である. 具体例としては, Frederick B. Mumford. *The Land Grant College Movement*. Univ. of Missouri, 1940, 11-15 を参照.
- 注48 スミソニアン研究所の設立と初期の歴史については, Akira Tachikawa. *The Two Sciences and Religion in Antebellum New England*. Ph.D. diss., Univ. of Wisconsin-Madison, 1978, 35ff 参照.
- 注49 Jesse B. Sears. *Philanthropy in the History of American Higher Education*. Transaction Pub. 1990, 23-24 参照.
- 注50 Frederick Jackson Turner. *op.cit.*, 283 参照.
- 注51 Harold M. Hyman. *American Singularity*. The Univ. of Georgia Press, 1986, 54 参照.
- 注52 Russell I. Thackrey. *The Future of the State University*. Univ. of Illinois Press, 1971, 9 参照.

## ジョナサン・ポールドウィン・ターナー 「産業大学論」(1851)

共 訳 立 川 明  
三 澤 紘一郎  
坂 本 太 郎  
横 山 耕 平

[1] あらゆる文明化された社会は、互いに協調して、敵対することのない、二つの明瞭な階級へと必然的に区別される。小さな方の階級は、宗教・法律・医学・科学・芸術・文学に関わる真正な諸原理を教授するのがその固有な仕事である。それより遥かに大規模な階級の方は、農業・商業・工芸の分野で何らかの労働に従事している。便宜上、前者を専門職階級 (professional class)、後者を生産者階級 (industrial class) と名付けよう。どちらかが他方より勤勉で (industrious) であると示唆するのは私の本意ではない。一方が知的活動面において、他方は産業活動において、等しく勤勉なのである。どんな場合でも、社会が100人のうち5人以上の専門職階級を必要とすることは絶えてないだろう。となれば、のこりの95人は生産者階級ということになる。現在のように、教師や公人たちの実に多くが生産者階級出身である限り、また向こう何十年にもわたり状況が同じであれば、100人のうち1人以上の専門職階級を実際に必要とせず、のこりの99人が生産者階級ということになる。

[2] 現在二つの階級が享受し、これまでも世界の隅々で享受してきた、両階級の必要と根本条件に適合する相応しい教養教育 (liberal education) には、実際的な手段という点からして、巨大な開きがあるという事実は、ものを考える人なら誰でも注意を引いて来たに違いない。確かに、この世界には同一の普遍的で抽象的な科学というものが、両階級にとって同じように存在する。ところが、一方の階級にとっては、こうした抽象的な真理をその日々の実務・仕事と効果的に結びつける手段が実在するのに対し、もう一方

の階級ではそうした手段が存在しない。新たに作られない限り金輪際存在しえないのである。

[3] 一方の階級は学校や神学校、カレッジ、大学、組織、教授などの多様な手段を所有していて、その子弟を、年月をかけて教育・訓練し、彼らの生涯の仕事となる特異な専門職に従事できるようにするのである。さらに、専門職階級それぞれに自ら使用すべく、一国の全艦隊を沈没せしめてもおかしくない程、巨大でおびただしい量の文献を作り上げているのである。

[4] けれども、生産者諸階級のどれにせよ具体的に即応した大学、組織、教授そして文献がどこにあるだろうか？再度いいたい、一体どこに？言葉を変えれば、社会にはずいぶんと昔から、自分の教師たちを教育する必要があると気付くだけの知恵はあった。しかし、労働者も同様に教育する必要があると気づくまで賢明になってはいないのである。こう言ったからといって、われわれの公立小学校が、全階級にたいし均しく同じように適応され応用されていることを私は忘れていたのではない。けれども読み、書き等だけでは、実の採集が農業だとか、船材の切り出しが航海だとはいえないのと同じく、とても教育にふさわしいとはいえないのである。そうした訓練はいわばただの原材料、あるいは手段、すなわち、その後続く教育のただの道具に過ぎず、もし、そうした道具として用いられなければ読み、書き等はその所有者にとっては、屋根裏の斧、船台上の朽ちた船同様、無用なのである。

[5] 私はまた、ヨーロッパにおいて、専制君主や貴族階級が、一族中で最も縁遠い親戚を、上流の農民 (genteel farmer) というより農民の監督者として訓練する期待を込めて、学校を設立した努力を知らないわけではない。更には、この国の歴史あるいくつもの専門職向け諸機関が、生産者階級の大衆の間での批判の炎が激しく燃え上がり過ぎないようにすべく、いくつもの“迎え火”をたいた (大草原の農民たちがいみじくもそう名づけたのだが) ことも忘れていたわけではない。これら諸機関は、自身の巨大な専



門職向けの蒸気船のわきにカヌーをつなぎ、州内の全農民や職人たちに、飛び乗って共に航海しようと呼びかけている。だが、問題は、彼らがカヌーへの誘いには乗らないことだ。しかし、われわれとしてはこうした骨折、好意だけでも感謝したい。われわれを救済しようとする最初の努力としては、こっけいなまでにお粗末ではあるものの、彼らのわれわれへの気配りが見て取れるからである。

〔6〕しかし、二つの単純な問いへの答えを出せば、われわれの全主題に関する答えを十分に示すことができるだろう。その答えは現段階では、ごくむき出しの大筋に留めざるをえないが、最初の問いは次のようである。

I. 生産者諸階級が求めるものは何であろうか？

II. そうした求めるものは如何にして満たしうるか？

〔7〕第一の問いには、簡潔に答えることができよう。彼らが必要とし、当然にも持つべきは、彼らの種々の営み（生涯の仕事）の真正な哲学、科学そして技術を理解し、既存の知識を仕事に効果的に応用し、その知識の領域を拡大せしめることを可能にするような、専門職諸階級がその仕事においてこれまで長く享受してきたのと同じ便宜なのである。したがって、彼らがまずなすべき仕事は、すでに豊かな水をたたえている泉から、空白個所へと水を供給し、知識の生きた流れを、彼らの手の届く範囲へと引き込むことだ。次なる仕事は、同じ泉に、さらに多くの水を供給する手助けをすることにある。生産者諸階級は如何に既存の機関や階級も貶めることを欲しない。日常的営みに対して、彼らは、万人が正当にもその資格ありと認めてくれる位置、万人が生産者諸階級に大志を抱くことを期待する位置にまで、自分たち自身と自分たち自身の仕事とを引き上げたいだけなのである。

2. そうした求めるものはどのように満たしうるか？

〔8〕この問いへ答えるにあたっては、私の心の中で、過去20年間、徐々に深まった印象や確信

の輪郭を、可能な限り率直かつ明晰に提示するよう努力し、主義主張を共有する同志たちがすべて価値ありと判断するものとして通用するようになりたい。

〔9〕まず第一に、私は否定的な形で答えたい。件の要望は、専門職諸階級向けに作られた既存のいかなる教育機関によっても満たされない。同じようにそうした諸機関に枝葉的に付随する二級でしかない学科によっても満たされることはない。

〔10〕これら諸機関はあれこれの専門職諸階級、特に聖職者の階級の必要を満たすべく、設計され、適応されたのである。それら諸機関は生産者諸階級向けとして、われわれが提示する機関が専門職階級に適合しないと全く同じ様に、生産者諸階級の真の要望には適さないのである。

〔11〕これら機関の全精神と目的とは、文学的、知的なものであり、またそうであるべきだろう。他方、実践的でも産業的でもないのである。その精神と目的は読書階級とスピーチの巧者の養成であって、仕事人や産業向きの無言の思考を育むものではない。しかし、最上の古典学者はしばしば最悪の実践的な思想家である。彼らが仕事人へと育成されるというのは神が定めた自然の法則に反する。二つの階級は、その全関心、仕事、そして生涯の根本条件の点で相反する方向を向いている。同じ教育課程が両階級に等しく適合することが全くにありえないのは、同じ仕事や習慣が両階級にとって等しく関心事となり益することがありえないのと全く同様なのである。

〔12〕生産者諸階級はこれらのことを知り、かつ実感しているがゆえに、公に有用な専門職者を期待するという範囲を超えては、既存の教育機関を支援していないし、今後も支援しないであろう。一般的な事実として、生産者諸階級の大多数は、既存の教育機関に対し冷淡な態度をとるし、今後も永遠に同じであろう。彼らはそれら機関を、それらが固有で適切な有用さを発揮する限りでは、期待しているし、大事にもするが、それら機関が決して切実な産業上の必要

という領分を埋め合わせることがないし、そうできないと知っているのである。彼らは彼ら自らの階級のために、類似の教養教育の体系を必要としている、しかも彼らの仕事に適応した体系を。彼ら自らのために、自らの専門的な必要に適応した産業上の文献を構築するべきである。彼らは支部の諸機関における教師や講師たちを育成せねばならない。そして、生産者階級自身と、その仕事と、彼らの子孫とを、人間社会において、神の計画したままの状態に釣り合った地位にまで、押し上げるべきなのである。

〔13〕プロテスタント、カトリックのいずれの国でも、全教育史が示すところによれば、われわれは高等教育機関から出発しなければならず、そうしなければ下級学校での成功は決しておぼつかないのである。理由は簡単で、知識も水も低所から高所へは流れないからである。いかなる人々も、まず、最初に高等教育機関と知識の源泉とを創設し、下部機関にたいして、教師その他を、供給できるようにしない以上、何らかの価値をもつ公立小学校や、下級の学校の体系ももつたためしはないし、もつことができないであろう。したがって、努力に値する何がしかの効果を期待するのならば、われわれはあらゆる経験と常識とに照らして、われわれが始めるべきと定まった場所から、出発することになるであろう。

〔14〕問題をわれわれのような見地から見れば、こうした過程の中で最初に求められる事柄は、国立科学研究所である。この施設は、国民精神の偉大な中心発光源として作用し、すべての中小機関がそこから光と熱を供給され、逆に中小諸機関に生じた熱と光をそこへ反射する、という施設である。私はそう信じているのだが、この第一の要件はジェームズ・スミソンが資金を提供し、アメリカ連邦議会がワシントンD. C.において法人化した、スミソニアン研究所によって、すでに満たされているのである。

〔15〕この高貴な施設と連携し、そこからの利益を生産者諸階級の実践的な生活において実現するため、各州に一校の生産者諸階級向け大学

と、それに続けて郡や都市ごとに支部機関、ライシウム、高校を必要とする。

〔16〕これら支部機関の目的は、人生におけるあらゆる実践的な仕事や専門職業にたいし、既存の知識を直截かつ効果的に応用し、われわれが現在所有する知識の境界線を実践的な全方向へと可能な限り押し広げることなのである。

〔17〕州立大学設立案—この州におけるそのような機関は、年々の必要な農業および園芸上の実験と作業に資するための、十分な広さをもつた様々な土壌と向き土地と連結しているべきである。

〔18〕日常および特別な用途のための適切な大きさと構造の諸建造物；物理学、化学、解剖学、工学用の十全な実験器具；あらゆる産業技術に関連し、それらを図解し、促進する全てを包含する総合的な展示室。とりわけこの州および近隣諸州に見出されるあらゆる種類の哺乳類、鳥類、爬虫類、昆虫、高木、低木、草など。

〔19〕以下の学問諸分野、要するに、どのような種類であれ、学生が熟練したいと期待するあらゆる仕事や、学生が遂行を求められることになろう責務に光を投ずる学問や科学を扱う全ての科目が、また学生の道徳人、市民、社会人、産業人への完成を保証するであろう全ての科目が、教授されるべきなのである。全ての動物、樹木、草木の解剖学および生理学、性質、本能および習性；それらの繁殖、長子権、成長、衰微、病気と健康、生命と死についての諸法則；土壌の性質、構成、適応、再生、工芸と手工に関わる全ての原材料の性質、強度、耐久性、保存、仕上げ、構成、費用、用途、および製造；全ての産業の過程に関わる政治的、財政的、家政的および労力的経済（あるいは手工的労力の節約）；国内法、憲法、民法の真の諸原理、州、家族、仕事場、農場における人間の労働の管理、監督あるいは指導に関わる真の理論と技術；近隣の法、すなわち隣人間の具体的な礼儀と礼譲の法、および一家の安全に必要な最低限の人間の健康と病気の諸原理；通商と商業に関する倫理的、慣習的、実務的な諸法；簿記と経理。

〔20〕理論的、實際的のいずれにせよ、いかなる種類の知識も排除されてはならない；もちろん、党派的政治家たちや教派的聖職者たちの綱領に見られる“組織的な無知”が知識の一種と誤解された場合は話は別であるが。

〔21〕独立した古典学科が加えられるべきか否かは、便宜上の問題である。そのような学科は既存のカレッジにより相応しい仕事として任せ、そうした目的のためそれらと實際的、経済的な結びつきを作るのが最適と考えられる場合もあるろうし、州立大学自身の都合のよい時期に古典学科を付設するのが最適と考えられる場合もあるかも知れない。

〔22〕知識の増加、応用と普及を促進するため、教授たちは彼らの学科において一連の年次実験を継続して行うべきである。

〔23〕例えば、(それぞれのエーカーを正確に測定し)ある変種の穀物を20エーカーかそれ以上に毎年蒔き、それぞれのエーカーごとに土壌の質、地作り、種子の種類と量、播種と植付けの時期と方法、栽培と刈入れの時期と方法と作業とに差をつけ、全ての経費と労働力その他、そして最終的な結果について正確に記録させよう。類似の実験を、異なった種の畑、果樹園、苗床、庭園の全ての産物について試みよう。様々な気温や明るさ、厩舎の有る無しの影響下での、家畜の異種交配、飼育、肥育についても同様である。青物の、乾燥した、生の、粉末にした、あるいは調理した、冷たい、あるいは暖かい餌について、土地固有の、あるいは海外からもたらされる様々な病気の性質、原因、治療法についても実験を試みよう。これら全てと、類似の主題について助言を与え、年次報告を作成するべきである。適当な季節には、生理学と昆虫学の教授を、可視、不可視なものを観察するのに必要な装置と共に国外に送り、精選した産物をしばしば台なしにし、数百万の同胞の健康、財産、生活を損ない苦しめる虫害、胴枯れ病、むれ腐れ、さび病、うどん粉病などの隠れた諸原因を綿密に観察させるべきである。化学の教授に州の土壌と生産物を注意深く分析させ、また標本

を維持、管理させ、それらの様々な特質、適応、欠点について報告させるべきである。

〔24〕同様の諸実験を、農業、機械工学、化学工業、鉱物学、商業、水上および陸上における交通、他の全ての関心事について行い、学生それぞれが選択して出席する研究分野または生活における労働の分野について、実践的かつ実験的な指導を行わせるべきである。特に、労力節約のためのあらゆる道具、器具、機械、動力、手順の利点を徹底的かつ実験的に比較試験し、説明することにより、それらの利益を直ちに享受できるよう、ないしは未熟、不注意による出費を回避できるようにするべきである。

〔25〕多くの思慮ある人物の信じるところでは、この州の年間生産の三分の一から二分の一が叙上の事柄に関する無知によって失われている。提案中の機関の全費用は、上の関心事だけについても数年のうちに州の節約することになる金額をほぼ疑いなく下回るであろうし。加えて他の知的、道徳的、社会的および金銭的利益も期待できるのである。

〔26〕そのような仕事のために必要とされる機構は明らかである。見事な造園術が施され例示できるような植物園および庭園、菜園、果樹園、適当な芝生と遊歩道用の土地が必要であり、必要な年次実験を首尾よく遂行するのに不可欠なあらゆる種類の干し草用、放牧用の牧草地、耕作地用の土地もなくてはならない。またそれらの土地には州の住民の健康、富、嗜好に奉仕するあらゆる種類の家畜と、あらゆる樹木、草、野菜が集められ、展示されなければならない。またそれらの性質、習性、長所、生産、改良、栽培、病気および事故について徹底的に調査され、試験され、学生および州民に知らされなければならない。

〔27〕更に、上述した全ての目的のために十分な数の建物と離れ家を、また機関の通常の道具および器具全てを保管し、あらゆる型の有用な器具や機会のモデルを折々に収集して公の使用に供されるに際しては試験を行うに必要な倉庫を建てるべきである。当初は、そのような倉庫

は発明家や商人の利益に叶うことであろう。しかし、同様の施設が他の州にも作られた暁には、政府はそれぞれの州で、ワシントンに現存する保管所に類似した特許申請事務所を大学に付属させ、この技術工芸および技能の部門を連邦全体の膨大な数の人々に利用しやすくするべきであろう。

〔28〕更に私は、そのようなものが不可能ではないことを前提して、適当な産業図書館を早急に入手しなければならないと断言する。こうした機関の教授たちの最初の、また最も重要な任務の一つは、生産者諸階級のために適切な実用的文献と一連の教科書とを、おそまきではあるが作り出すことである。

〔29〕教授たちに関しては、高名であり、専門諸分野において実践的能力の持ち主であるべきことは当然であるが、しかし機関と彼らの繋がりには、彼らが計画する事業を完遂するに十分なほど確固とし、安定的なものでなければならない。さもなければ、この制度の特異な価値は失われてしまうであろう。

〔30〕講義その他を通じての指導は、年の寒冷な月々に主として行われるべきであり、暖かい時期は教授たちには研究調査、学生たちには実家、あるいは大学構内で必要な労働のために充てられるべきである。

〔31〕この機関は、一定年齢以上の全ての階級の学生たちにたいして、三ヶ月でも七年でも必要な長さだけ開かれているべきであり、それぞれ学生が望む分野の技術について、多きにせよ少なきにせよ望むだけの程度まで、教えを受けられるべきである。全ての学生は、それぞれの能力が考慮された上で、学費および食費を、全部または一部、金銭または構内での必要な労働によって支払うべきである。

〔32〕労働に従事する者の中で、最も迅速に、熱意を傾け、配慮に富み、技能を示して課題を遂行した者には、能力を賞する賞牌や表彰状を与えるべきであり、怠惰で始末に負えないと判明したものは、まず全ての労働から、また、態度が徹底的に改まらないのであれば、機関その

ものから速やかに除外するべきである。ここでは、放蕩者や伊達者の法ではなく、自然の法が尊重され、労働のみが尊く、怠惰は破滅ではないとしても明らかな恥辱であるということをしての者の胸に刻まねばならない。

〔33〕年の便宜のいい時期に、大学の卒業式、あるいは恒例の展示会を数日続けて行うべきであろう。この際には、機関の全ての扉は、その所有する工芸上の秘藏品や知識上の資産と共に開け放たれ、州全体から可能な限り多く集められた農業、工業技術に関わる対象物や、審査に基づく奨励金獲得の目的で州民から持ち込まれたそれぞれの模範品が展示されるべきである。審査は、機関とは完全に独立の委員会が行わなければならない。この機会にはまた、教授たちや勉学の進歩著しい学生たちの可能な限り多くが、それぞれの分野での多様な研究対象や関心事について、間断なく講義し説明する労を取るべきである。要するにこの機会には、この機関と、全生産者階級と、州内の他の全ての階級にとって、壮大な祭りの日となるべきなのである。彼らが自らの産物と技能とを展示し、同様な諸階級の間に、実践的な知識を活気に溢れて力強く行き渡らせ、そうした知識の普及と追究への熱情をいやが上にも高める機会なのである。

〔34〕現状を見ればわれわれの世界では、既存の実践的な知識についてさえ、その応用や普及のためいかなる効率的な方法も取り入れていない有り様である。確かにわれわれは初級読本、綴り方、新聞の世間への普及についてはまずまず手中に収め、それをもって驚異的な事業を成し遂げたと考えている。比較的にいえばその通りかも知れない。けれども、そうした成果が驚異だというなら、まだ出番を待つ別な驚異のみならず、新しい未知の光の世界からこの世の生産者の胸に程なく射し込むであろう、常人には想像も及ばぬ奇跡さえいくつも待ち受けているのである。

〔35〕かくして、叙上のような機関が努力して到達すべき目標の大まかな概要が、甚だ不完全にはあるが、われわれの眼前に現れて来る。

何世代もの人々が叙上の機関を雄大さや栄光の点で完璧となした暁には、その姿はいかなるものであるかについては、読者の想像に委ねたい。例えば人間、全ての階級の全ての人々にたいし良いものを提供する手段という点で、またその機関に属する道具や、実験、教育、更には毎年の公開講義や年報だけでなく、あらゆる職業の場で働き、全ての町や村で教育や講演に携る何千ものその卒業生を通して、実践的な知識や技能を、真正な嗜好、勤労意欲、そして健全な道徳観を進歩させかつ普及する力という点において、いかなるものでありえようか。その上で、同じ読者に真剣に自問して欲しいのであるが、こうした目標こそ少なくとも努力に値する目標ではないだろうか、神自身が、ほかならぬ創造の行為を通して、この地上で初の農業・商業州とすべく計画した一つの州にとって、誠に相応しい目標ではないだろうか、と。

〔36〕こうした州の人民を他にして、自分たちの遺産と、責任と、運命とに向けて相応しく息子たちを教育するという、かくも輝かしい手本を世界に示す人々がいるとは考えられない。われわれの国には、有用な実験をあらゆる仕方で、それ自体の楽しみのために行うに十分な、古からの不可譲の富と恒久的な余暇と手段とを備えた貴族階級がない。そうであればわれわれは、ちょうど統治者を選挙する要領で、こうした目的に特化した貴族階級を自らの階級の間から創出し、彼らがわれわれの上に君臨し支配することなく、援助の手を差し伸べ奉仕するようにさせねばならないのである。これが成功すれば、われわれはヨットや銃器や刈り取り機で英国や世界を打負かすだけでなく、人類の福祉と真の栄光とに貢献する他の全ての面でも世界をリードすることになるであろう。

〔37〕この州の全ての農民、全ての職人の息子たちが、こうした機関をたとえ年に一日だけでも訪問できるとすれば、彼らの中に眠るエネルギーを呼び覚まし方向づけて、機関への全投資額に見合う以上の効果をもつであろうし、彼らには決して必要なく知りたくもない内容の見せ

掛けの学業に長期間を充てて励むより、遥かに効果があるのである。

〔38〕現状を見れば、最も優秀な農民や職人であっても、生まれつきの能力に頼りつつ、個々の経験が辿る緩慢な過程に沿って学ぶ場合には、二十歳のときであれば六ヶ月間で教わられたであろう内容を、四十歳を待ってはじめて理解することになろう。他方、更に不幸か、ないしは能力に恵まれない数多くの者たちは、自分の技芸の正確な原理のどれ一つをとっても、駆け出し時代と変わらず無知なままで生涯を終える。実力ある人物であれば、こうした数多い者たちが居住する所どこでも見られる自堕落な無知と荒廃とに仰天する。その上、こうした者たちが「本に書かれた（無用の）農業理論」など何一つ知らない、「息子たちは自分たちに劣らず立派に農業ができています」と豪語するのを聞いて、更に驚いてしまうのである。確かに、息子たちが彼らにさえ劣っていたとしたなら、哀れもここに極まるでことであろう。

〔39〕われわれの大学の後援者は、こうした後者ではなく、前者の階級の間こそ見出し出されるであろう。柵もない庭に丸太小屋が立ち、そこでは豚と豚のような人間とが、四本足の連中が間違っても優越などしない限り、平等な権利を享受している……せいぜいこうした事態しか地上での喜びとして描けない人物は、産業諸大学の後援者には相応しくない。相応しくないのも当然であろう。彼はすでに全てを知り尽くしているのだから。

〔40〕教育のない農民にはもう一つの階級がある。彼らは自分たちの全資本と雇用した労働者をつぎ込み、巨大な規模で単一の作物を栽培するのであるが、真新しい農地で生産するなら、全く技能のない労働者を使っても、十分な収益を間違いなくあげ得るのである。さて、こうした階級の人々はしばしば急激に富を蓄積するが、しかし農業の技能によってではない。彼らの技能は資本と労働力の管理能力から成るのであって、農業の技能は全くもたないのである。試しに、こうした管理能力を彼らから奪ったうえで、

多種栽培の小規模な農場へ閉じ込めてみたらいい。本物の農民ならば多少の財産を蓄積するところだが、彼らの方は五年も経てば餓死するであろう。にもかかわらず、こうした階級は一般的にはすぐさま教育の側に立つのである。傍観者の目には、彼らこそ農業で獲得された技能など無用であることを示す具体例と映るようであるが、正確には、資本が、比較的無能力な人々の手中にあっても発揮する不可抗な力の一例でしかない、と認知されるべきなのである。

[41] われわれの構想する諸機関こそ、階級的な教育、階級的な立法、階級的な文芸を矯正する唯一可能な手段である。もしある特定の階級が、自分たち向けの教養教育を州の中でやりたいように準備し、他方、別な階級がこうした努力を怠るならば、前者の階級が支配階級ないし孤絶した階級を形成し、自分たちの権力を自分自身の排他的な利害のため、ないし仲間たちの利益のため行使することは、重力の法則と同じように不可避となろう。

[42] もしも生産者階級がこの州内で教育ある唯一の階級であったとしたら、この階級の人口が大きい分、彼らが手中に収める階級的な権力は今よりも遥かに巨大となろう。しかし、現在までのところ、生産者向けの教育は全く無視されてきており、様々な生産者階級は彼らの死活に関わる最重要な諸事実について依然として無知なままで放っておかれている。これにたいし、伝統的な諸専門職の方は、些細でばかげた事どもまで最重要事項へと針小棒大、拡大解釈されるまで学び尽し、それら事どもを巡って騒々しい言葉の渦と、たわいない何樽分もインクとを徒に費やしているのである。

[43] これもまた、教養・実践的な教育をすべて、人間の生活の狭い単一の方面へと詰め込もうとすることの必然的な結果である。そうした無理強いのため、生来は専門職には全く適性のない者たちがそうした職の隊列に群がることになる。これら者たちの多くは、もっと肌に合った教養文化の下でなら、産業専門職の名誉ある一員となったであろうが、現実には学識中心の

専門職での餓えたハイエナに成り下がっているのである。彼らの知識欲はもとより愛すべきで心から推奨すべきものであった。だがそうした知識の獲得のために、彼らを自然な生活空間から追放してしまった必然性のほうは、実に嘆かわしい限りである。

[44] しかし、われわれがここで提唱しようとする普通教育の体系は（ここで列挙するには多すぎるほどの理由で）、真の専門職階級の尊厳、権力、数、そして資源とをいや増すであろうような体系なのである。

[45] 更にまた学生が受ける精神のおよび道徳的な鍛練上の利点も見逃せない。実際のところ、こうした意見こそ異端中の異端であると私が明瞭に自覚していたのでなかったら、そうした利点をこそ最重要事項として書き留めたであろう。私は、古い世界（ヨーロッパ）の修道士や聖職者たち皆のみならず、新世界（アメリカ）でのその少なからぬ後裔たちが居並ぶ審判で、罪状認否を強いられる自分の光景を想像するだけで、身震いする思いである。専門職の諸階級に属する者たちが立派な書き手、話し手になることは、極めて重要だと看做されている。したがって彼らは、死語か現代語かを問わず、言語のあらゆる形態について実に絶え間なく反復練習を課されている。けれどもこうした課程が最も有益かどうかについては、唯一の例外を除き、現在の諸専門職についてさえ極めて疑わしくなっている。唯一の例外とは文学と神学の教授たちの場合で、これら諸言語は彼らの専門職の基礎にあたり、将来の生活手段としても不可欠な道具となるからである。

[46] しかしながら、こうした特殊な教育課程に帰せられる精神陶冶の少なからぬ割り合いは、実は教師や友人たちの中の優れた人物と、長年にわたり日々交際することから生じるのであって、当事者たちが調和ある仲間として留まり続ける限り、他のいかなる経緯においても生じうるのである。他方、オリジナルで身についた思考力を欠くような、また、完璧であっても、ラテン語とギリシア語の知識以外は一切もたない

ような古典語教師は、それだけで一世代全体の少年たちを窒息させ、みな彼と同じ学者ぶった役立たずに育ててしまうに十分である。意味も分からぬ単語を日々詰め込むことで精神を満たしたり作り上げたり、更には精神を物理的に増大させさえするという発想、つまりからっぽの頭から優れた成果を搾り出すという恐るべき企ては、人に卓越して賢く分別もあり、かつそうした企てに長い経験を有する者の手にでも委ねない限り、ともかく成功など全くおぼつかない。素朴な人間の尋常で鈍感な感覚をもってしては、こうした訓練の実施に伴う損失を理解するのは完全に不可能である。加えて一般に、自分で知悉している内容に照らして、世間に公言してよい限度を遥かに超え、言動を展開する者が数多い。時代の社会的な雰囲気醸成しがちな、説教のこうした慢性的下痢状態が公衆の健全さに資する度合いは、多くの人たちが想定するより遥かに小さい。クエーカー教徒たちの歴史の示す所では、健全な常識、純粋な道徳、高い実践的敬虔さといったものは、説教の多さに伴って生じるというより、まったくそれらを欠く状態の方がより良く存在しうるし、実際存在しているものである。

[47] 実際、私の考えでは、合理的な判断力の鍛練の手段として、古代の知識を擁護すべく組み立てられた排他的かつ無茶な主張は、そうした古典文学を創作した偉人たち、ないしこの国やヨーロッパで古典文学の研究に献身した近代の名士たちに照らして検討するとき、まさしく滑稽である。もしそうした古典が無謬の実践的な思索者たちをつくり出すとしても、現実にはわれわれの手元には何千もの無謬な、相反する諸真理が残されており、正義や利害関係、責務や救済へ至る一万もの相対立する道筋が示されているのである。誰にせよ自分の目を開け耳で聞くことを厭わないなら、こうした捕らえ所のない鍛練が、人間の推論能力の向上に果たしてどのくらい貢献できるか、これまでしてきたか、詭弁的な言葉を弄したり紋切り型のたわごとをのたまう力についてはどうか、たちどころに気

づくであろう。そういうわけだから、くたくだとした長演説ではなく、明瞭な諸事実だけが審理にあたり重みをもつのであれば、私は私の提案した計画の反対者たちと、その計画が生徒の精神の力を発達させるのに遥かに優れているという根拠だけに限ってもよいから、論戦を交えるのにやぶさかでない。

[48] 誰にでも可能で、最も自然かつ効果的な精神鍛練は、彼が日々行い、見て、そして取り扱う物について、またそれらのあらゆる相互連関や相互利益に対して、真剣かつ不断に思考する中で生じる。生産者階級にとっての、最終的な到達目標は、自分たちを思索する労働者へと作り上げることである。他方、専門職の階級については、われわれは彼らを労働する思索者としたいと希望すべきである。身体に滋養を供し装飾を施すために品々を生産するのが一つの階級の仕事の最終目的であり、精神について同じ目的のために思考を生産するのがもう一つの階級の最終目的である。しかし、精神も肉体も共に、以前の世代が残した殻を糧に生きることはできない。そして、不断にわれわれに迫るこの再生産の必要があるからこそ、相当には異なるとしても、等しく名誉ある労働と責務の経歴が二つの階級に開かれることとなり、そして、直ちに納得されるであろうが、そうした労働と責務に応じて教育と準備との様態は変わるべきであり、そうでなくてはならないのである。

[49] 読書人の場合であれば、たとえ自身の豆の蒔き方や馬具の取り付け方を知らずとも、また、自身の体の機能が心臓や胃や肺によって、はたまた砂囊やえらで果されているのかを知らずとも、現存しない国家や言語に属する地下墓地の真中にいきなり飛び込んだり、ギリシア・ローマ人、ノバヤ=ゼムリヤやカムチャッカ、更には恒星の世界へ飛翔したりしても一向にかまわなれないかも知れない。しかし、仕事人にとっては、自身と将来の自分の仕事からいきなり飛び出してしまうのは、自然と常識のもっとも明白な原理に反することである。そのような世界観に立つ教育家たちが、これまで生産者階級の教

養 (liberal culture) など不可能だと考えてきたのも無理はない。というのも教育家たちは、生産者階級の将来の仕事には教養はまるで不適切としか思われないうり方のみで、彼らを教育する方法を試みてきたばかりか、それしか思いつきもしなかったのだから。聖職者に相応しい思考や規律の習慣をつけさせるため、彼らに耕作させたり、胴枯れ病の侵食や昆虫や穀物の成長について学ばせたりするのはいかにもばかげていると見えるだろう。けれども、これに比べれば、聞いたこともない言語、抽象的な問題や理論、形而上学的な空想物や屁理屈を仕事人に教えようという逆の試みのほうが、実際には、倍以上もばかげているのである。

〔50〕 もちろん、このような一連の教育の主題があまりに感覚依存的で粗雑だという理由で、その上に純粹で高尚な精神文化が位置づくことなどありえないと考える人たちもあろう。しかし、これらの主題はまさしく、ありえる全ての知識を、抽象的なもの、その中間、実用的なもの、も含めて、全ての科学の様式や側面を包括している。要するに、そうした領域は、神が創造された全てのもの、人間の技術が成し遂げた全てのものを、包含しているのである。もし神の創造になる宇宙と人間の最高度の技術とが、われわれの洗練された用途には粗雑過ぎるというならば、“明けの明星や神の子ら”がその失敗がなされたときに直ちに気づかなかったとは哀れである。しかしながら、私が思うに、これらの主題は、人類の幸福と精神の健全な発展にとって、医学における「万能薬」の調合や、神学や法学における究極の虚構の説、銀河系についての様々な推量、ギリシア語のアクセントなどに比べ、等しく重要なものである。もちろん、千人に「一人」の者の学者然とした専門的な諸事の方が、残り999人の日々の生々しい関心事よりも遥かに重要だというなら、話は別であるが。

〔51〕 けれども、生産者諸階級を対象にしたそのような大学を作り、基金を集めることは可能なのだろうか。まちがいなく可能であるし、生

産者諸階級がそう決意しさえすれば、今すぐにも可能である。連邦政府からわれわれの州へこうした目的を明示して与えられた基金は、ほかの財源を一切頼らなくとも、十分な額である。この基金を他の目的に転用することは、法的濫用とはいわないまでも、卑劣な悪用である。この基金は一般の人々、この州の全州民に与えられたのであって、特定の階級、政党、宗教的セクト、セクトの連合体に与えられたのでもない。また、公立小学校や家庭学校、古典学校に与えられたのでもない。そうではなく、「大学」ないし高い水準の (high school 以上の) 学校用として与えられたのである。そこでは、当然、全ての階級の市民たちがもっとも学びたいと希望すること、すなわち、彼ら自身の義務や生涯かけての仕事、が例外なく教えられなければならない。こうした大学が、こうした大学だけが、真の、ことばの本来の意味における大学なのである。そして法学、神学、医学という三つの専門職のみに必要な全てを教える機関が、それゆえをもって、大学だというのであれば、人間の生活の多様な専門全てに必要なあらゆることを教える機関のほうが、間違いなく遥かに、大学の名にも資質にも相応しいというべきである。

〔52〕 では、そのような目的のために基金を本当に役立たせるためには、その基金の庇護権、管理権を、誰の手に委ねたらよいか？私は何のためらいも不安もなく、こう答える。全ての所有権は、法律上ないし宗教的ないかなる仲介者や顧問も介すことなく、直接に州民、全州民の手にはじめから帰すべきであると。もっとも、彼ら自身が指名した代理人や彼ら自身の陪審員や法廷は別格である。当然ながらそれらの人たちにたいしては、全ての人が等しく従わなければならないのである。基金は州民に与えられたもので、州民の財産なのであり、立法府議員や政党や宗教的セクトの財産ではない。州民は、基金に当然必要な安全や、(大学の) 活動や教育計画に欠き得ない一貫性と抵触しない範囲で、その基金を全面的に管理すべきである。私の信ずるところでは、州民たちは自分たちで基金を



十二分に管理できる。どんな学識のある者でも、こうした管理以上のことを期待するとは思えないのである。

[53] 基金をただちにかつ永久的に、政治的および宗教的な支配の及ばないところへ置くことの理由は、誰の目にも明らかである。というのも、もし政治的支配の下に置かれると、基金は長期にわたり与党の単なる政治的道具となり、他方、彼らの政敵たちにとっては妬みに基づく恐怖や嫌悪の対象に止まるからである。そうならなくとも、基金はそのときどきの政党利害や対立感情が命ずるままにあちらこちらへと蹴りまわられ、全政党の単なるフットボールへと成り下がってしまう。われわれが熟知している如く、見せ掛けだけの教育機関を、議会による支配の名の下に、政党の対立感情に翻弄されることを通して、実に何百万ドルにもものぼる資金がこれまでどぶに投げ捨てられる以上に浪費されてきた。したがって、われわれの州の議員たちがそうした問題点を実感するに十分な知性を発揮し、州民たちが基金を必要としかつ安全に管理できると確信し始めたまさにこの時、様々な根拠をもって、「教育機関基金」を現在のあらゆるしがらみから自由に維持しようとしてくれたことは、この上ない感謝に値するのである。基金が州民以外のもの手に委ねられることを期待する議員など、貴族かデマゴグでもない限り、一人もいないはずである。

[54] 同様の困難が宗教的セクトに基金が運営される場合にも起こる。どれか一つの政党や宗教セクトが新大学を首尾よく運営すると仮定してみよう。彼らの敵たちが、そうした理由のゆえに新大学に反対し中傷するということはないにしても、しかし冷淡に振舞うことは確かだ。したがって、誰であれすぐ理解すると思うのだが、新大学を政治や宗教セクトから実際に引き離すだけでなく、そうした影響の嫌疑さえ引き起こさないよう、細心の注意を払うべきなのである。新大学の設立認許状が与えられるとき、与党が理事の多数を野党から選ぶようなことがあれば、与党はあるべき正しい精神を示すこと

となり、将来長きにわたって、本当の寛大さを示す模範となるだろう。なぜなら、彼らの政敵もそれにたいしては敬意を払い、見習わざるを得ないだろうし、一般の人々も高く評価するだろうから。勝利のヒーローは、勇敢であるとともに寛容たり得る。勝利者の名に値する者は、みな勇敢かつ寛容である他はありえないのである。最初の理事に続く後の指名においても、候補者は、個々人の取り柄を明白に尊重し、同時にあらゆる党派的、セクト的な関係を排除して選ばれ、全体の公平な善のみが求められているという確信が貫かれるようであるべきである。これら全ては、次のような事柄が、出発点において十分に知られていれば、さ程の困難もなく実現可能であろう。すなわち州民は、対象がどんな人物であるにせよ、投票上の取り引きをしたり、直接的ないし間接的に偏狭で卑劣で利己的な行動や影響力を行使したり、責任回避や遅延行動をしたり、自己を有利に見せ掛けるだけのために経歴詐称等を意図したりするならば、そうした人物は結局のところ、(奴隷のない)自由州に託された諸関心事のうちの最大のもの、すなわちその土地の全ての子弟を適切かつ立派に教育するという関心事を妨害し危うくする、という点に常に目を光らせているということである。そうしたあくどい卑劣漢が居る場合には、州民はそのような人物にたいし、未来永劫にわたって、カインに押されたものより黒く、真昼に比しての深夜より暗い烙印を押そうではないか。ここでの問題は、何よりもまず、男であれば、男として堂々と率直に対決したいと念ずる問題である。われらが議員たちはそういう態度をとるだろうか？ 私個人としては、彼らはそうすると信じる。そうでないと証明されるまでは、そう信じていたい。私は、一般的なし方ではあるが、最大の目的が確実に達成される方法を提案さえしようと思う。しかし、他の人々がよりよい方法を提案するのであれば、喜んでそれに同調しよう。

[55] まず州知事に、大学の基金を信託する理事会を指名してもらおう。この理事会は、州内で

もっとも有能かつ思慮に富んだ五名から構成される。五名のうち、少なくとも四名は、州の四隅からそれぞれ集めよう。そうするのは、新大学の所在地への近接という点で、人的にも財産的にも十分に距離があり、いかなる不公正の疑いからも自由にするためである。議会にその指名を追認してもらおう。理事会には、州全体の人々の利益と便宜という観点から、新大学の所在地を決める仕事を委ねよう。理事会がそうした決定を終えたら、理事会に新たに十二名の構成員を選ぶ権限を与えよう。彼らは、理事会の空席を将来にわたり補充する権限をもち、それぞれの選挙には理事会全体の三分の二の票を必要とする。年次会で空席を埋められなかった場合には、理事会の誰かがそう要請すれば、州知事がその席を一年間占めることになる。年次会のいずれかの部分を欠席した理事は、病気で出席不可能がその時点で証明されていないかぎり、その席を失うことにしよう。そういう場合は、理事会は、その欠席者を再選するか、あるいは別の人物を選ぶことにより空席を補充することになる。また、同じ規定に基づいて、基金は上記のように組織された理事会に永久な信託として移管され、一方理事の各自は適切な額の保証金をもってこれを担保すべきである。こうして基金は、イリノイ州の産業大学の基本財産および設立資金として用いられるべきである。

〔56〕このようにして構成された理事会は、いかなる議会、宗教的セクト、政党にたいしてもなく、州民たち自身にたいし直接責任を負うであろうし、そうあるべきである。法と正義の法廷において、それぞれ一人ひとりの州民に対してである。したがって大学の理事の誰にせよ、その信託を利己的、地縁的、政治的、また宗教セクト的な目的のために怠り、濫用、悪用することがあれば、あるいは、信託の遂行能力に欠けることを示すことがあれば、理事会の他の構成員全員と州民の全員とは、適切な裁きの場で、彼を解任する権利を有するべきである。そして、有罪と判明すれば、理事会は彼を解雇し、適任者をもって彼の席を占めさせるよう命ずるべき

である。当然ながら、悪意にもとづく告発の危険を防止するために、十分な注意を払わなければならないが。

〔57〕疑いなく、このプランに対して異議が出てくるであろうし、他の様々なプランも提起されるだろう。それらの多くは容易に予想できるものだが、今ここではそれらに言及する十分な余裕はない。例えば、ある者たちは公立小学校を完璧なものにしたいとの熱烈で賞賛に値する願望を抱いており、その目的のためにずっと長く基金を使いたいと考えている。しかしながら、基金がその目的に長期にわたり使われるだけもつとは思えないし、もし仮にもつのだとしても、あらゆる種類の初等段階の学校は、基金が他のどんな場所で使われるよりも、まさしくここで用いられることで恩恵を受けることは自明であると私は考える。

〔58〕また、別の者たちは、世界史上初めて、一般の民衆があらゆる政治的、宗教的コントロールから距離を取り、自分たち自身のための教養教育のシステムを作ろうとしているのを見て、多少の驚愕を感じるだろう。しかし、よく考えてくれるなら、そういった人々もこのプランに賛成してくれるだろう。もし彼らが、変わるには歳を取りすぎているのだとしても、彼らの子どもたちはきっと賛成してくれることだろう。

以上の翻訳は、Mary Turner Carriel. *The Life of Jonathan Baldwin Turner*. Univ. of Illinois Press, 1961, pp. 69-85に収録されたターナーの演説文を底本とした。コピーライトに関わる問い合わせに迅速に応じてくれたイリノイ大学出版局に感謝する。